

## 医療に関する問題の討論会 .....

11月11日(火)に、理数科2年メディカルコースの生徒による標記の討論会を行いました。この討論会は今年で3年目となります。テーマは

### 出生前診断の是非について

です。生徒は賛成・反対に分かれて意見を述べ合いました。

出生前診断(正確には、新型出生前診断)とは、ニュースや新聞等で報道されることも多いのでご存知の方も多いと思います。

新型出生前診断とは、妊婦から採血しその血液中の遺伝子を解析することにより、胎児の染色体や遺伝子を比べる非侵襲的検査である。日本においては、2013年4月より、日本医学会の認定・登録委員会により認定された施設での検査が始まった。2013年11月22日、NIPTコンソーシアムが検査結果を集計したところ、新型出生前診断を受けたのは約3500人であり、そのうち67人が陽性と判定され、56人が異常ありと診断された。異常ありと診断された者の9割が中絶を選択していると発表された。(以上、Wikipediaより)

当日は、長岡中央総合病院副院長の富所 隆先生をコーディネーターにお招きし、討論会を進めていきました。富所先生には、生徒の発言のひとつひとつを丁寧にフォローしていただきました。先生のお話を聞くことで、生徒は自身の考えを深めることができました。



以下は、生徒の感想です。

今日の討論会で命の尊さについて改めて考えさせられました。私は、出生前診断については反対ですが、賛成派の意見も聞いてみると、絶対に反対とは言えなくなりました。実際の妊婦になってみたり、障害者になってみなくてはわからないこともたくさんあります。それゆえに、この問題には正解は存在しません。金銭、社会、宗教、家庭、価値観、とにかく多面的な点に関わってきます。どれも考える上では大切な要素だと思いました。この討論会の前に、出生前診断についてはある程度調べてきましたが、母体保護法の拡大解釈や親の選択権といったことは新たに知ることができた部分であり、こうやってみんなの知識を共有して、考える引き出しが増えていくのは素晴らしいことだと思いました。特に印象に残っている主張は、「検査結果が陽性だったときの中絶する割合が97%という事実は、逆に考えると、それだけの人々がもしその子どもを産んでいたら育てられなかったかもしれない」というものです。私はこの「中絶する割合が97%」は反対派の意見を述べるためのデータにしようと考えていたので、その逆の考えはまったくありませんでした。

正解のない問題で、かつ命に関わる重要な問題であるので、ひとりよがりの考えは、それはそれでありであるが、たくさんの人の意見を聞いた上で自分なりの結論を出すことが大切だと思いました。今回の討論を通して、私は依然として出生前診断には反対ですが、多面的にこの問題と向き合っていきたいです。(男・反対)

今回の討論会で、人によって考え方や視点が違うことが分かりました。また、根本的には同じような考えでも、賛成か反対かの判断が違っていたりもして、私の考え方にも参考になりました。

討論会を終えて、出生前診断には、良い所と悪い所があると分かりました。その上で私は、悪い所、例えば社会のサポートが足りないなどの点をこれから改善していくことができると思うので、より制度をよいものにすれば、出生前診断を進めていくべきだと考えました。もちろん、診断を受けたくなかったり、受けなくていいと考えていたりする人に強要することには反対ですが、不安を抱えていて診断を受けるかどうか迷っている人に対しては、受けてもらうべきだと思います。診断結果によって安心できることが多く、逆に陽性だったとしても、そこで命と向き合い、その生まれてくる子どもに対して、親として悩んだり自分の考えを持ったりすることは良いことです。現在は、陽性だった人の97%が中絶を選ぶと聞きましたが、これから社会が障害を持つ人々に対してしっかりと支援ができるようになり、障害を持つ子どもを産むことに自信が持てるようになるといいと思います。これから高齢出産も多くなり、少子高齢化の問題もあるので、出生前診断によって経済的な面や生活面、精神的にも障害者を受け入れられるような社会を作っていくべきです。(女・賛成)

とても考えさせられる討論だった。出生前診断には中絶が付きもの。中絶についてどう思うか。社会や周りの人は障害者に対してどう接していくべきか。そもそも障害を持つとうこのは悲しいことなのか。もし自分が障害を持つ子の親であったらどう思うか。といった様々な観点から討論が行われた。

討論の中で、「障害者でもヘレン・ケラーのように人生を精一杯生きた人もいる、出生前診断は障害者に向けた差別だ」という意見や、「まだ検査が100%正確でなく、間違いも多い」という話もあった。また、自分の実体験を交えて発言した人もおり、とても親近感をもって聞けた。

今回の討論会を通して、出生前診断への考え方だけでなく、障害や中絶について考えることの難しさ、自分たちがはたすべき役割等、様々なことが学べた。今後の参考にしたい。(男・反対)

今回の討論会では、とても多くのことを考えることができた。その場の思いつきで発言したところもあったが、それがまた自分の意見を見直すよい材料になった。出生前診断は、賛成・反対の意見の理由が二律背反していて、こうだから反対といっても、その理由で賛成という風に、とても深い内容だと思う。私は、この討論会の前までは反対の立場をとっていた。しかし、出生前診断について調べていく中で、賛成の立場が変わった。40歳以上での高齢出産は、ハイリスクだし、子どもを育てる上でも大変なことがたくさんある。だから、出生前診断というマテリアルを通して、出産について考えることができるのだと思う。この考えるということが、後々、子育ての中で生きてくと思う。基本的に中絶はしない方が良く思う。しかし、子どもに責任が持てないのなら産まない方が良くとも思う。結局、被害者は子どもなのだから。胎児の人権とは、すぐ定義が難しいと思う。だから問題が複雑化している面もある。きっと胎児は生まれてきたいと思うはずだけど、無責任に子育てされるのはもっと嫌だと思う。反対意見の中で、日本の社会がまだまだ未熟だという意見が多く挙げられていた。そのことに関しては、よく分かるし、その面で反対だという気持ちは私の中でもある。しかし、社会からのサポートが手厚くないからこそ、出生前診断によって生まれてくる子どものサポートをする体制が家族の中でできることが良く思う。

私が思うに、出生前診断についての情報がまだ広く正確に伝わっていない。「出生前診断」という名ばかりが一人歩きして、本来の目的が置き去りにされている。今回の討論会を通して思ったのだが、現在このような情報社会だからこそ、うわべだけをすくい取るができるし、そのうわべだけの情報に流されやすくなっているということだ。マスメディアの取り上げ方もそれぞれだから、1つのことだけを見たり、1つの視点からだけのことを見たり、情報はたくさん仕入れていても内容が偏っていたり、ということがあると思う。できる限り、双方の意見を見ようとしても偏りが生じてしまう感は否めない。(女・賛成)

非常に難しいテーマで、賛成か反対か容易に判断しかねます。このテーマに限らず、多くの医療に関する問題には正解が存在しません。けれども、将来医療に携わろうという志望をもつ理数科メディカルコースの生徒には、普段からこういった問題に関心を持ち、自分の考えを、根拠をもって表明できるようになってもらいたいと考えています。